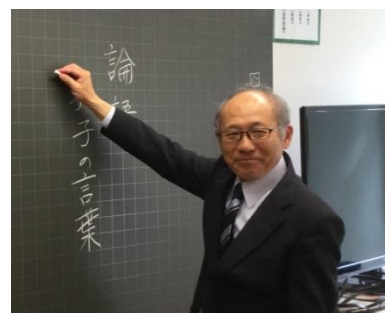


2018年度のスタートにあたって  
～グローバル人材の育成をめざして～



チューリッヒ日本人学校 校長 東 明彦

豊かな緑に囲まれて鳥のさえずりが澄みわたる Uster の春を迎えました。校庭には木蓮や桜、林檎の花が咲き、毎日明るい陽ざしを浴びながら児童生徒たちは登校しています。

30年以上の歴史を誇るチューリッヒ日本人学校は、現在、児童生徒11名という小規模校ですが、始業式で本校の児童生徒を見たときに、その表情の明るさ、話を聞く態度の落ち着き、輝く瞳に感心しました。私は、その児童生徒たちの前で「11人もの個性と可能性を秘めた子どもたちが懸命に学ぼうとしている姿を誇らしいと思います。」と話しました。

海外で生活し、日本人としてのアイデンティティーを確立することは、容易なことではありません。文化・言葉・生活・人間関係等、すべての土台があってこそそのアイデンティティーは形成されるものだと思います。言葉ひとつをとっても、人が言葉で思考し、議論し、表現することは、実はとても難しいことです。日本国内にいる時には、日本語で話し、日本語を聞き、書き、読むという行為は至極当たり前のことのように感じていますが、日本の習慣や生活様式、今流行っている社会的な現象などから離れて日本語を高いレベルで修得することは大変に難しいことです。「武器としてのことば」という表現があります。かなり強い言葉ではありますが、ある意味で文化と文化がぶつかり合い、混じりあう環境では、

その意味合いも切実に理解できることがあります。

文部科学省では、グローバル人材の育成に大変に力を入れています。今、日本が置かれている立場を考えると、更なるグローバル人材の育成が喫緊の課題であると言えます。その戦略の中に、言語に関する領域がありますが、日本語や他国の言語を高いレベルで駆使して、一対一の交渉だけでなく、集団のなかでのコミュニケーションや交渉ができることをグローバルな人材の基準の一つとしています。また、日本人として、自国の文化に誇りをもち、その豊かな文化を日本語以外の言語で紹介し、円滑な人間関係が構築できることも求められています。

チューリッヒ日本人学校は、日本語を母語として確立し、その上に、広い視野や他国の文化を受け入れようとする基本的な姿勢、自国の文化の豊かさを児童生徒に体験を通して伝えていきたいと考えています。

チューリッヒの中心街で開催されたゼクセロイテン（春の祭り）に、チューリッヒ日本人学校・補習授業校の児童生徒、そして教職員や保護者の皆さままで参加をしましたが、児童生徒たちが演奏する和太鼓や飴を手渡しで沿道の人たちに贈るという姿に、観客も笑顔で応えてくれたことがとても印象的でした。

チューリッヒ日本人学校にしかできない教育がある。一人ひとりの個性や能力を最大限に尊重し、アクティブラーニングを通してグローバル人材の基盤を培っていくこと。そして児童生徒たちにとって安全で安心して学べる環境をつくることが私たちの役割だと考えています。

チューリッヒ日本人学校の教職員一同、それぞれの個性と指導力を最大限に発揮して児童生徒一人ひとりの成長の支援に邁進いたします。